

キャラクター名  
クベル・スカルビエブナ・カビニエータ

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス サラマンダー		ワークス	入院患者	カヴァー	魔術師
	オプション		年齢	26	性別	♀
覚醒	命令	衝動	解放	初期侵食率	41	%
出自	呪われた家	経験	身体の剥奪	邂逅	恩人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	3	0	0			3	行動値	6
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	6
精神	3	1	0			4	戦闘移動	11
社会	1	0	0			1	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	9		射撃			RC			交渉		
回避			知覚			意志	3		調達	1	
運転:			芸術:			知識:クオクルフ	4		情報:噂話	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
氷炎の剣	白兵	3r+8	6	24		100↓,地獄の氷炎・ハイテクノロジー込,2個
スカルスローン	白兵	3r+9	18	23		100%未満で使用不可,素手として扱う
合成	白兵	3r+8	42	33		100↑,素手,2個

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
ガールン断章	
要人への貸し	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
後援者	P	N		
クベル・スカルビエブナ・カビニエータ	P 保護	N 偏愛		
クリス・ローズ	P 感謝	N 食傷		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
マルチアクション	1		min				3	
効果:	min追加							
氷炎の剣	3		min				2	
効果:	攻+[lv+6],G+6,命-[2-1] (w/ハイテクノロジー)							
地獄の氷炎	5		min				3	
効果:	↑攻orG+[lv*3]							
青:自在刃	1		min				2+1	
効果:	攻+[素手のG]							
氷の回廊	1		min				1	
効果:	飛行戦闘移動+[lv*2]m							
黒:物質合成	1		maj				5+2	
効果:	武器2つ融合							
赤:マルチウエポン	1		maj				3+1	
効果:	命-[5-lv],武器2つ使用攻撃							
conc.uro	3		maj				2	
効果:	C-[lv]							
白:時間凍結	1		ini				5+2	
効果:	mp行う,HP20消費,1/sr							
紫:八重垣	1		aut				3+1	
効果:	G時2つ武器使用							
パワースーツ:ピサイド	1							
効果:	攻射程+10m,判定+4d							
鏡のアイデア	1							
効果:	武器作成時複製							
ハイテクノロジー	1							
効果:	装備時に行う白兵達成値+1(計算済)							

能力ルーツ:アフォーム=ザー

どれ程危険な書であろうと、それを火に焼べることは許されない。  
積み重ねられてきた知の結晶が、一時の都合のために失われることなどあってはならない。  
そんな炎は全て、我が身が引き受ける。

本来は自らの精神を薪とすることで氷れる炎を生み出す能力。  
加えてその家系に伝わる、反転した世界、または逆数の世界を映すと言われている"鏡"により、マクスウェルの悪魔を司る。  
膨大な熱量と、一方でそれを奪われたことで発生する極低温の冷気。熱力学第二法則に対する冒瀆とも言える力を操る。  
しかし結社からは、自らの存在ごと薪として焼べる躊躇の無さを懸念され特別な魔術道具を渡されている。  
それは所持者と一体化し、代わりに肉を補強する外骨格。  
これにより一時的ではあるが彼女自身を燃焼すること無く力行使できるが、実際のところは、肉体そのものが消失するほどの火力を噴出させても体を再生できるように肉体の"鑄型"として扱っているのが現状である。  
また能力の酷使により身体に異常をきたしており、成長不全で年齢に比して幼い外見にも関わらず、その声は低くしわがれた不快な音である。

・カビニエータ家の末路  
かつて禁書を守護する書士として栄えていた家系。  
だが狂気に関わる者たちが安寧とした日々をいつまでも送ることなど出来はしない。  
とある"昆虫"に目をつけられたのだ。そしていとも容易く一家は乗っ取られた。  
ただ幸か不幸か、その"昆虫"は下等な生物が大事に保護していた書物に興味を示した。  
元々精神的な探求に飽くなき存在である"昆虫"によって、例え人間の中でもは並外れて賢しい人も、矮小な存在に過ぎず、感情という非論理的な側面にしか目が向かないはずであった。

